



# 志木中だより



8・9月号平成29年8月29日

志木市立志木中学校

志木市柏町 3-2-2

TEL 048-471-0143

## “古典文学”からの学びを生かす 校長 飯田 寛

長い夏季休業が終わり、2学期がスタートしました。休み中、大きな事故もなく、皆元気で登校することができ何よりです。生徒は、休み中でも部活動に汗を流し、各種大会や練習試合、コンクールにと大活躍でした。また、夏季休業中は教職員にとっても貴重な研修の場が多く、本校の職員も様々な場面で研修を受けたり、研修成果を発表したりと充実した日々となりました。教職員・生徒共々、蓄えた力や体験を2学期の教育活動に生かし、活気ある志木中づくりに向かって力を合わせる日々になってくれることを心から願う2学期の初めです。

● ● ● ● ●

毎年、戸田市の市民大学講座で古典文学の講義をしています。既に5年目になり、今年はいよいよ長編の『平家物語』を繙きます。30代から80代という幅広い受講生の皆さんに何とか満足してもらえよう、毎年夏から準備を始めます。古典が専門ではない私ですが、毎年古典文学に接し原文や参考資料を読んでいると、現代の私たちの生活や社会に通じる課題が多く出てきて、改めて古典を読むことの意義と楽しさを味わっています。そんなわけで今年の夏は『平家物語』と格闘しました。

皆さんもご存知のように、『平家物語』の根底に流れる思想は“無常観”です。「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり・・・」の冒頭はあまりにも有名です。そして、『平家』は、平清盛を中心とする平家一門の興亡を描いた一大叙事詩です。この“無常観”を、現代人である私たちは日常の中でどれだけ実感としてとらえているのでしょうか。または、明確な意識として日々感じているのでしょうか。私は、現代社会は“今、目の前”の現象や情報のみにとらわれ、その根底に流れる変化に気づきにくい時代であると思っています。よくよく目を凝らさないと、ものの本質が見えないのです。さらに、煩わしい問題や課題、そして「古い」や「死」といったものからは極力遠ざかろうとする傾向が強いことも事実です。

教育という営みを考えるとき、子供は日々絶えず変化している、同じ状態は一日たりとてないという認識をしっかりと持つことが大切です。そして、心の奥深いところを見つめ、抱えている問題に正対する覚悟をもつことが今必要です。中学生という多感で未完成な段階の子供に接するとき、『平家物語』をはじめとする古典文学作品が現代人に示唆してくれるものは意外に大きいと私は感じています。



# 志木中だより



10月号平成29年9月29日

志木市立志木中学校

志木市柏町 3-2-2

TEL048-471-0143

## ゆく夏、そして秋来る

校長 飯田 寛

雨が多かったとはいえ、年々猛暑日が増える夏も過ぎ去り、いよいよ秋の到来です。秋の彼岸も過ぎ、空気がからっと澄み渡る日も間近です。

日本には、季節の変化を如実に表現する文芸として俳句があります。「575」のわずか17音に時候や天文、人事や自然を盛り込み、自己の生活や人生までも読み込める世界で一番短い詩が俳句です。最近は、テレビの「プレバト」という番組で静かなブームを呼んでいます。

そこで、今回は志木中の3年生が国語の時間に作った俳句から幾つかを紹介することにします。本人の了承を得て、多少私の添削が入っています。「ゆく夏」を惜しみながら、今年の「夏」と、それをうけとめる中学生の感性を味わってください。(俳句は本来縦書きですが、ここでは都合上横書きで失礼します。)

- 君の声振り向きざまに汗の散る  
(熊谷哉人)
- 水面に照り映え開く花火かな  
(松宮崇之)
- 夏祭り歓声湧くや大太鼓 (内田梨緒)
- 夕焼けが大空そめる帰り道 (岡田円花)
- 野球部と声をほり合う蝉時雨  
(金子智泰)
- 花火より大きい鼓動彼女の手 (谷畑陸)

いかかですか。なかなかでしょう。俳句は誰にでも作れる身近な文芸です。が、最低限の決まりがあります。一言で言えば、俳句は原則「有季定型」、つまり5・7・5の17音に季語を一つ入れて作ります。そして、できれば「や・かな・けり・・・」などの「切れ字」を入れて響きを持たせる。俳句は韻文ですから、この切れ字がとても大切なのです。

その他、「作り方」として大きく二つのパターン(「一物の句」と「二物衝撃・配合の句」)があるのですが、興味のある方はぜひ調べて、名句をものにしてみてください。季節はいよいよ秋本番です。よい俳句を作る絶好の季節です。

では最後に、私の「今年の夏」を俳句で紹介します。

- 太宰忌や少し濃い目のハイボール
- ギター弦そっとはじくや青時雨
- 六月も果てて冷酒のビンひとつ
- 薄掛けや眠気を誘ふ失恋歌
- 静かさや主亡き家の蝉しぐれ
- 夾竹桃若き教師に悩みあり
- 河童忌や梨なくした文庫本
- 提灯をつり下げ妻の盆支度
- 幼子の白き手合はす蝉の墓

ご家庭でぜひ俳句を作り合うといいと思います。俳句は人を豊かに幸せにします。



# 志木中だより



11月号 平成29年11月1日



志木市立志木中学校

志木市柏町 3-2-2

TEL 048-471-0143

## 「虹の足」～“見えないもの”こそ大切～

校長 飯田 寛

雨があがって 雲間から  
乾麺みたいに真直な  
陽射しがたくさん地上に刺さり  
行手に榛名山が見えたころ  
山路を登るバスの中で見たのだ、  
虹の足を。  
眼下にひろがる田圃の上に  
虹がそっと足を下ろしたのを！  
野面にすらりと足を置いて  
虹のアーチが軽やかに  
すっくと空に立ったのを！  
その虹の足の底に  
小さな村といくつかの家が  
すっぽり抱かれて染めていたのだ。  
それなのに  
家から飛び出して虹の足をさわろ  
うとする人影は見えない。  
おい、君の家が虹の中にあるぞオ  
乗客たらは頬を火照らせ  
野面に立った虹の足に見とれた。  
多分、あれはバスの中の僕らには  
見えて 村の人々には見えないの  
だ。そんなこともあるのだろう。  
他人には見えて  
自分には見えない幸福の中で  
格別驚きもせず  
幸福に生きていることがー

私の好きな詩人の一人である吉野弘さんの詩「虹の足」です。人は、せつかく自分の足元に転がっている何気ない幸せやチャンスのかげらになかなか気づかないことがあります。そして、後になって「あの時は幸福だったんだなあ。」と気づかされるのです。

“学校のよさ”や“子供のよさ”も同様です。学校や子供を評価する指針は数多くありますが、とにかく世間は“目に見える”事柄のみに目が行きがちです。その学校の研究発表の回数であるとか学力テストの結果ですとか、体育大会での実績とか・・・これらは確かに学校の実績の一つではありますが、私は学校の良さとは、もっと生徒や教職員の内面にあるものに目を向けなければいけないと常日頃思っています。

思いやりや温かい心、みんなで感動を共有する姿勢、何事にも感謝する気持ち・・・目に見えないものほど大切なのです。そして、感謝や感動する豊かな情緒こそ「美」であり、人が生きていく上での基盤なのです。基盤にそうした豊かな感性や情緒があるとピシッと人生を築くことができます。志木中学校はまさにそのような学校になりつつあります。そして、志木中生もそんな頼もしい人間に育っています。「良さ」は身近な足元にころがっているものです。